

## 大人になる前のジェンダー論



■ 浅野 富美枝  
■ 細谷 実、八幡悦子  
■ 池谷壽夫 著  
■ はるか書房  
■ 2010年初版  
■ 1,500円(税別)

筆者らは、高校生や大学生など大人になる前の人々には、学校の勉強以外に、家事能力、健康維持能力、人間関係構築力など獲得すべき能力が8つあって、その前知識として、ジェンダーを理解することが必要だと指摘する。友人との交遊、見た目やモテ問題、セックス、恋愛、デートDV、家族、将来のことなど、大人未熟の人が煩悶する問題の多くが、因習的なジェンダーに根差していることを喝破しているからである。

一方、セクシュアリティは性的欲望、衝動、指向を含む性の総体をあらわす概念で、ジェンダーが自然であることの「科学的」根拠として用いられてきた。しかし、本書コラム「カミングアウト5秒前」で発せられた「(ゲイを)なんでキモイとかアリエナイとかっていうんだろう。俺らが異性愛者を見てもキモイとか思わないのに…」というセクシュアル・マイノリティの声は、異性愛が自然で、それから逸脱した人は異常だとみなすまなざしが社会には存在し、そのことがセクシュアリティの多様性を見えにくくしているこ

とに気づかせてくれる。

本書は、大人になる前の人々が遭遇するさまざまな場面をもとに、社会には人間を「女性」と「男性」とに二分化し、その枠組みから逸脱することを抑圧する社会・文化装置がはたらいていることをわかりやすく解き示してくれる。

### 性的指向(sexual orientation)

異性、同性、あるいは両性に対する性的関心、恋愛感情および行為、ならびにそれらの関心を共有する他者との同一性の意識を含む概念。ヘテロセクシュアル(異性愛)、ゲイ/レズビアン(同性愛)、バイセクシュアル(両性愛)の3つの枠組みで議論されることが多い。しかし、アメリカ心理学会における数十年に及ぶ研究の蓄積によって、性的指向における関心の対象は、異性から同性にまで及ぶ連続体で、「異性愛」「同性愛」といった境界をもって画することはできないことが実証されている。

よしむら あきのり  
吉村 明訓 (産業医科大学医学部1年生)



## 親子という病



■ 香山リカ 著  
■ 講談社  
■ 2008年初版  
■ 700円(税別)

はたして健全な親子関係は存在しうるのか。本書では、家族愛が礼賛される一方、虐待件数の増加や家庭内殺人事件の報道が相次ぐ事実に言及し、現代の親子の問題を、精神分析学、心理学、社会学、芸術作品、スピリチュアル現象などをもとに、親子のすれ違いを明らかにし、家庭の密室化が親子という病を深くしていると指摘する。

中でも3章に渡って言及される母性愛について、親子の支配関係が明示される。科学的根拠がないのになぜ世間では幅を利かせているのか。それは家族の絆で社会保障費を軽減したい国の思惑と一致するのだ、と断じる筆者の意見には大いに納得させられる。また、過剰な母性愛は娘では「支配—被支配」、息子では「包み込む—包まれる」の関係を持ち、性別で様相が違うという解説も非常に興味深い。つまり、母性愛神話は親子の絆の希薄化を嫌う政治家や母の愛は絶対だと信じている男性に守られ、親子を自立から遠ざけているのだ。

精神科医でもある筆者は、畢竟、今日のあらゆる

親子関係は病的で「治療不可能な病」と断言する。その上で、「親は選べないが、人生は選べることを忘れない」などの処方箋を示した実用的な一冊である。

### 母性愛神話

女性は子を産み育てる本能を持ち、その本質は献身的な愛であるとする母性観。だが、母性愛は本能ではなく、近代家族制度を維持するために作られた言説で、育児ストレス、母子密着、父親不在の子育てなど様々な問題の一因となっている。筆者は、母性愛は子を支配し加害的に働く点で「親子という病」を支えていることを指摘し、親子双方の自立の大切さを主張する。

他方、近年の発達心理学は「個」と「関係性」、それぞれに基づくアイデンティティの統合こそ成熟した大人の在り方であるとする。女性にのみ子育てを担わせようとする風潮は、男性の心理的発達の機会を奪っていることを覚えておきたい。

くろせ こ  
黒瀬 まり子 (北九州市立男女共同参画センター特別相談員、臨床心理士)



## 合併号特別寄稿

### 「本の力」

～豊かな読書環境を！～



くさがや けいこ  
児童文学作家 草谷 桂子

さっきまで取っ組み合いの喧嘩で息を荒らげていた男の子2人、読み始めた絵本に次第に引き込まれ、穏やかに、時に笑い声を立てながら聞き入っている。家庭文庫を主催して30年。「本の力に助けられている」と思うことが何度あったことか!

絵本『ぼくのブック・ウーマン』(ヘザー・ヘンソン=文、デイビッド・スモール=絵、藤原宏之=訳、さ・え・ら書房)を読んだときも、私の狭い範囲での体験に通じる「本の力」の大きさを再確認した。

この絵本は、嵐の日も雪の日も馬に乗って険しい山道を登り、子どもたちに本を届け続けた女性と、初めて字を覚え、読むことを知った少年との交流を描いている。孤独だった少年の顔は、本を読む喜びを知るたびに和らぎ輝いていく。大恐慌の1930年代のアメリカが舞台で、馬に乗って僻地に本を運んだモデルの「ブック・ウーマン」は、不景気による失業者救済のための、政府の雇用促進事業の1つだったそうだ。どんな財政難の時代であっても、きめ細かな読書環境整備が重点政策の1つであったとは、さすが図書館先進国である。

私は家庭文庫を主催する一方で、図書館のあり方に関心をもち活動している。なぜなら、個人のボランティアや家庭だけでは当然限界があり、地域の図書館サービスの良し悪しが、待たなしの子ども達の健やかな成長に大きく影響すると思うからだ。

30年の間に、文庫に来る子どもたちの家庭や文化環境が激変した。家庭で手厚い保護のもとに育つ子と放任される子に両極されてきたと感じる。巷には子どもの目に触れさせたくない情報が否応なしに氾濫し、安全な遊び場、居場所は少なくなった。書店では、売れ筋のものが幅を利かせ、子どもの心の深い所に届く本は目に入りにくくなった。

せめて公では情報格差・文化格差をなくすべく踏ん張って欲しい。社会全体が豊かでなければ、個人の豊かさもあり得ないと思うからだ。

